

## 令和7年度 学力向上に係る効果的な取組事例

# 児童の資質・能力の育成に向け、ICT 機器を効果的に活用しながら 「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させた授業実践 松伏町教育委員会・松伏町立松伏小学校

## 「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を目指した取組事例

### 現状と課題

#### 1. 児童の実態把握と学習支援・授業展開の工夫

児童の習熟度や学習理解には大きな差があり、一人一人に応じた学習支援や授業づくりが求められる。一方、少人数指導や TT による支援だけでは、すべての児童に十分な指導が届かない場面も見られる。学習指導要領が示す「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を踏まえ、児童の学習履歴や思考の流れを丁寧に把握し、指導方法の改善につなげていくことが必要となる。

#### 2. 学習活動時間の確保とイメージ共有の工夫

協働的な学びを深めるためには、十分な学習時間の確保が不可欠である。一方、ノート指導だけでは、自力解決において一人一人が考えをもつことができなかつたり、ペアやグループの発表、全体での練り上げに時間がかかってしまつたりする。また、言葉や文字だけの発表では、共通のイメージをもつことが難しい場面もあることから、タブレット端末や黒板、視覚的な資料などを活用し、考えを共有しやすい環境を整えることが重要である。

#### 3. 振り返りの形骸化への対応

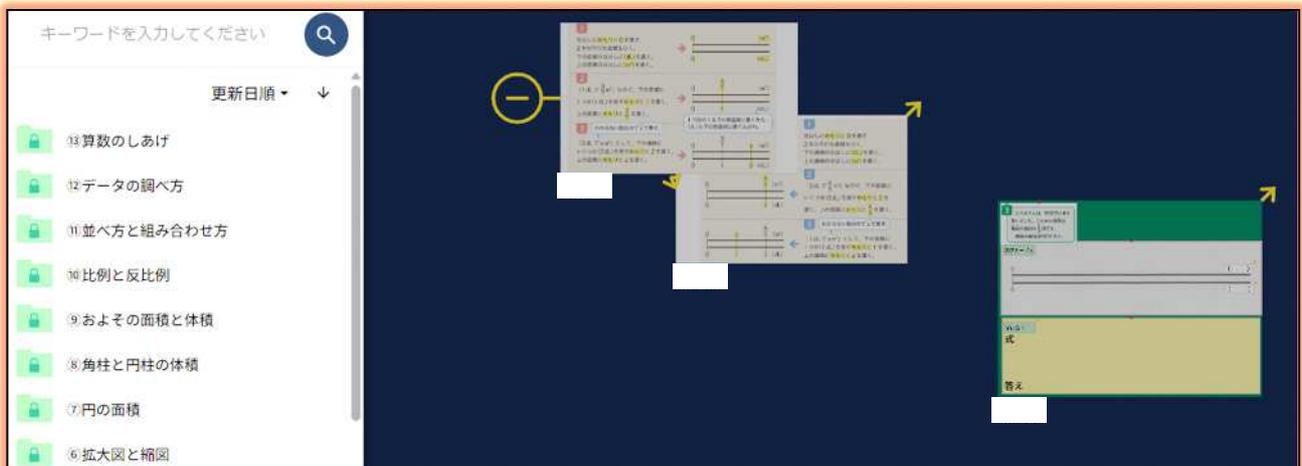
授業の振り返りは時間の確保が難しく、形だけにとどまってしまうことがある。結果として、学習の目標や評価の観点を意識した振り返りが十分に行われていない状況も見受けられる。児童が自らの学びを客観的に捉え、次の学習につなげていくためには、短時間でも焦点を明確にした振り返りの工夫が求められる。

### 取組の概要

1. 学習形態の工夫（学びの選択）や ICT 機器を効果的に活用し、学習の個性化や指導の個別化を進めることで、一人一人が自分の考えをもち、主体的に学習に取り組めるようにする。
2. 学習形態の工夫（学びの選択）や ICT 機器の活用により、多様な考えに触れる機会を設けることで、他者の意見との共通点や相違点に気づき、自身の考えを再構築し、より深い学びにつなげる。
3. 振り返りのモデルを作成し、記録・蓄積することで、児童が自ら学習の深まりを実感できるようにするとともに、教師が児童の理解や課題を的確に把握できるようにする。

### 実践例①

## ICT 機器による学習の個性化や指導の個別化



学習支援アプリを活用し、事前に学年や単元ごとのデータを整理しておくことで、児童が前時までの学習内容を自由に振り返ったり、ヒントカードを活用したりできるようにする。必要に応じて、児童自身がヒントカードを利用したり、教師がデータを送信したりすることで、自力解決を支援する。児童は個々の能力に応じて、ノートやタブレット端末を用いて自分の考えをまとめる。

これにより、教師は児童一人一人の学習状況を把握し、個への指導に重点を置くことができる。

実践例②

# 学びの選択による学習の個性化や 指導の個別化

- 第5学年・国語
- 資料と文章のつながりをいかして、環境問題についてレポートを書こう！
- 【教材】「固有種が教えてくれること」「統計資料の読み方」
- 「自然環境を守るために」（光村図書）

◆身に付けさせたい力

- ①目的に応じて、資料と文章のつながりから文章を理解する力
- ②自己の現状を振り返り、学習を調整する力

◆個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実に向けた工夫

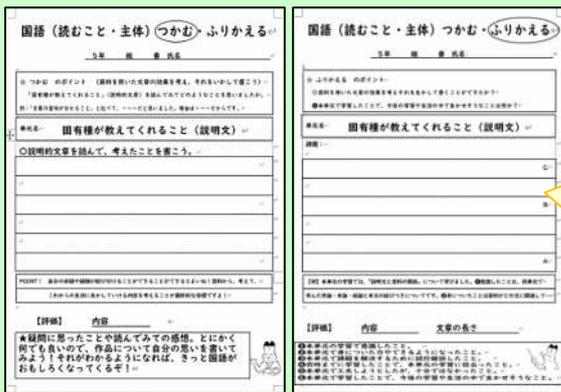
【学習形態の選択】

問いに対して考える場面やレポートを作成する場面など、様々な局面において、「①個人で ②グループで ③教員と」の三つの学びの形態を選択できるようにした。選択にあたっては、単元の最終的な到達点を示し、その到達に向けて自己の現状を振り返らせた上で、「どの形態を選択すればゴールにたどり着けるか」を考えさせた。

【単元の見通し】

単元のはじめに「国語単元振り返りシート（つかむ・ふりかえる）」を活用し、学習の見通しをもたせた。

また、毎時間の終わりに「国語科自己評価シート」を用い、振り返りの観点を明示しながら「どのようなことが身に付いたか」「次時の授業に生かすこと」などを記述させることで、学習調整力の育成を図るとともに、教師側の継続的な見取りにつなげている。



選択① 個人で



選択② グループで



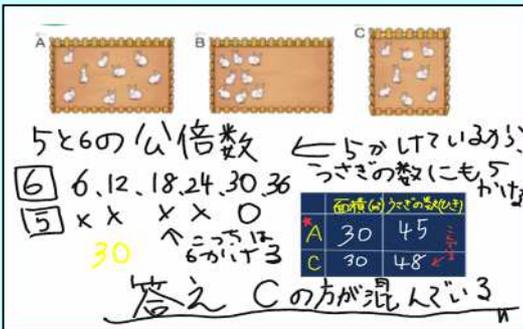
選択③ 教員と

- ①「つかむ」を通し、児童の実態を把握することと同時に、学習するうえで必要な内容を児童に紹介する。
- ②「ふりかえる」を通し、児童の学びの自己調整力の確認と、主体的に学習に取り組む態度の評価を行う。

実践例③

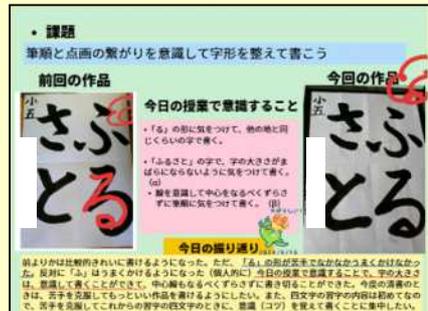
# イメージの共有

ペアやグループでの発表の際には、ノートやタブレット端末を用いて互いの意見を共有する。図を用いた説明では、写真だけでなく、必要に応じて動画を撮影しておくことで、思考の過程をより分かりやすく相手に伝えることができる。また、学級全体の意見を常に確認できるようにしておくことで、児童はより多くの意見に触れ、自分の考えを深めることができる。



実践例④

# 振り返り活動の充実



振り返りのモデルを作成し、ICT 機器を活用して蓄積することで、児童自身が学習の深まりを実感でき、教師も児童の学習状況を的確に把握できるようにする。

また、教科の特性に応じて振り返りのモデルを変えることで、より視点を意識した振り返りが可能となる。書写や体育などの教科では、自身の作品や演技を毎回比較でき、次時の課題設定につながるるとともに、学習意欲の向上が図れる。理科では、実験結果のまとめだけでなく、他のグループとの比較・検討にも活用でき、思考を深める一助となる。